

75 狂言の魅力 (2021年8月19日)

「能楽」という言葉をご存じでしょうか？実は、「能」と「狂言」を合わせて「能楽」と言います。では、能と狂言には、どのような違いがあるのでしょうか？

能と狂言はどちらも、約700年前に成立した「猿楽」と呼ばれた芸能を起源とします。二つの違いをごく簡単に説明すると、能は貴族社会や神話を題材とした悲劇で、笛や太鼓といった日本の伝統楽器の伴奏が付き、舞（踊り）があり、一つの舞台を上演するには楽器奏者も含めると三十名程度を必要とします。一方の狂言は、庶民の生活を題材とした喜劇です。舞もありますが台詞を中心とした演目で、数名で演じられます。能楽の公演では能と狂言が交互に上演され、観客は悲劇と喜劇と同時に楽しむことができます。

能も狂言も、2008年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。狂言は、能と比べて上演時間が短く、ちょっとしたいたずらや言葉遊びをテーマにした演目が多いことから、気軽に鑑賞することができます。華やかな舞台装置はなく、扇などの限られた小道具を使った演出は、観客の想像力をかきたてます。

フランス語辞書のLe Robert illustré 2021には、「能」は掲載されていますが「狂言」はありません。実は、能公演の際には同時に狂言も上演されているのですが、フランスでは「théâtre No」(能公演)と呼ばれることが多いことから、「狂言」という単語が知られていません。実際に狂言を観た人は、狂言は分かりやすく、親しみやすいと感じられるようです。

狂言師の小笠原弘晃さんは、3歳のときからお父様の小笠原由禰さんの元で狂言を学び、12歳でパリへ移住して現在はパリの大学に通う学生です。小笠原さんは、堪能なフランス語力を活かして、フランス人に狂言の魅力を伝えようと努められています。小笠原さんは、狂言の魅力は、「無駄を削ぎ落としたシンプルな様式美の中に万国共通の人間の本質を描き出し、弱さや愚かささえも笑いに昇華させて「それでいいんだ、それが人間なんだ」と笑いとばし、生きる力を与えてくれる芸能である。」と話されます。日本とフランスでの活躍が期待される小笠原さんによって、フランス人のユーモアのセンスに響く「フランス狂言」が上演される日が来るかもしれません。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

